夢童

菅波　茂

ジャワ島中部地震緊急医療支援活動

5月27日午前5時54分。インドネシアのジャワ島中部で地震が発生した。死者数は約5700人、負傷者数3万6000人である。竹にしっくいを塗った壁の伝統的な家屋ではなく、社会的ステータスとなったレンガ造りの家屋が被害の主な原因である。

今回の救援活動では摩訶不思議な状況が出現した。5月28日から、AMDAインドネシア支部長のタンラ教授が岡山市の本部で救援活動の陣頭指揮を執ったことだ。「現地の問題を一番良く知っている者が一番良い答えを持っている」というローカルイニシアチブを発揮できた。

被災地のジョクジャカルタに最も近いソロ市にあるインドネシア唯一の国立整形外科病院には500人近い重傷患者が手術を待っていた。5人の整形外科医と3人の麻酔科医で編成したインドネシア医療チームは、スラウェシ島マカッサルを出発して28日に到着。29日から1日当たり50人に手術した。同時にジョクジャカルタのサルジト国立病院でも活動を始めた。

両方の病院ともタンラ教授の教え子が勤務しており、AMDA医療チームの受け入れを調整してくれた。タンラ教授はAMDAの各国支部長に国際電話を入れた。「どんどん医療チームを送れ。受け入れに問題なし」と。

現在は、プランバナン郡ペレン村での巡回診療も開始している。日本、マレーシア、カナダ、ネパール、フィリピン、そしてカンボジアを加えて7カ国から医師23人、看護師6人そして調整員5人の総計34人がAMDA多国籍医師団として救援活動を実施している。

なぜタンラ教授が日本にいたのか。タンラ教授は、某新聞社が主催した国際会議にシンポジストとして参加したカラ・インドネシア副大統領に随行していたのだった。地震の発生する前日の26日午後3時に、私はタンラ教授と共にカラ副大統領と話し合っていた。

「多国籍医師団は世界中の紛争や災害の被災者のため活動している。インドネシア支部がインドネシアの国旗と共に世界中で活躍することを積極的に支援してほしい。私は具体的な計画書を作っている。正式にジャカルタを訪問したい」という要望に「どうぞ、おいでください」という好意的な返事だった。その翌日の地震発生だった。多国籍医師団の活動が一段落したら、カラ副大統領を訪問する予定である。

04年12月26日に発生したスマトラ沖地震・津波の被災者救援活動のために10カ国で編成した多国籍医師団は、インドネシア、スリランカ、そしてインドの3カ国に100人以上のスタッフを派遣できた。経験と自信は貴重である。今回の多国籍医師団派遣が円滑に実施できた最大の要因だった。各国支部長の動きは迅速だった。本部職員の対応も適確だった。

国境を超える難民や災害の救援活動には被災地の国家主権との連携は重要である。AMDAは何故に人を助けるのか。友人のためである。友人が困った時はお互いさまの相互扶助である。友人のネットワーク拡大が不可欠である。

時として国家主権の壁が友人としての相互扶助の活動を拒むことがある。「人道支援に国境なし」の理想が現実の国家主権を無視しているとすれば、いつまでも理想のままである。「援助を受ける側にもプライドがある」という原則を無視している可能性を危惧する。危惧に終われば幸いである。

（AMDA代表）

＝題字は筆者